

## 「亭子院」引用の意義

——桐壺卷の「長恨歌の御絵」を通して——

藤河家 利 昭

『源氏物語』桐壺卷に、「亭子院」（宇多上皇）の描かせた「長恨歌の御絵」があり、それには「伊勢、貫之」に詠ませた歌と漢詩が書いてある。これは『伊勢集』に、同じく「亭子院」が「長恨歌の屏風」を描かせて伊勢に歌を詠ませたことに基づいているが、實在の天皇名が出されることについてはまだ充分に検討されていないと思われる。ここでは絵に書いてあったと思われる『長恨歌』の詩句や伊勢の歌を引く物語がどのような方向をめざしているか、またその到達したものを通して、「亭子院」の名が引かれたことの意義について考えてみたい。

### 一、「亭子院」の「長恨歌の御絵」

桐壺卷に、帝の使いで亡き桐壺更衣の里邸に弔問に行つた鞍負命婦が帰参する、その時の帝の様子を述べた場面である。

御前の壺前栽のいとおもしろき盛りなるを御覧ずるやうにて、忍びやかに、心にくきかぎりの女房四五人さぶらはせたまひて、御物語せさせたまふなりけり。このごろ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ、枕言にせさせたまふ。（注一）（一・三三）

帝は、奥ゆかしい女房だけ四五人を相手に話をしているが、その内容は、帝が近頃見ている、「亭子院」が『長恨歌』の絵を描かせ、それに伊勢、貫之に詠ませた歌でも漢詩でも、もっぱらそういった筋の話題であるという。伊勢の詠んだ歌については、『伊勢集』にあり、亭子院が『長恨歌』の屏風を描かせ、その所々に歌を詠ませたことによるとされている。（注二）

史実が取り入れられていることについて、『河海抄』（料

命婦弔問の段こそ長恨歌の後半、道士が蓬萊宮に太真を尋ねる場面の移しなることを、思わざるをえない」とされてゐる。「しるしの釵」は、「唯旧物を持ちて深情を表はさんと 鈿合金釵寄せて持ちて去らしむ」<sup>(注11)</sup>に、また歌の「まほろし」は、「君王が展転の思ひを感じしが為に 遂に方士を捜し出したという証拠の釵であればと思うが、それは詮ないことである。その上でなお魂の居場所を知るためにそこへ尋ねていく幻術士がいてくれたらと願う。帝は「まぼろしもがな」と、『長恨歌』の世界を希求するが、それは相違を認識した上での希求なのである。形見の品が齎されるのが『長恨歌』では終末部に位置すること、またここからその引用が明確になされることから、この帝の歌はその引用の方向を導くものではないかと思われる。

この帝の歌は、「はるかに桐壺更衣の最期の歌と呼応し、生死を超えた贈答歌の趣を持つ」<sup>(注12)</sup>と言われるが、むしろ『長恨歌』と違って二人の意志の疎通ができないうところに桐壺巻の物語の特徴があると考えられる。更衣の歌、「かぎりとして別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり」(二三三)は、死に臨んで帝のために生きることを痛切に希求するのであり、帝の歌も更衣亡き後にその魂の在処を追い求める

方士を希求するものである。実現できないと知りつつ、なおそれを希求せざるを得ないところに共に深い悲しみがあるといふことはできよう。それよりも『長恨歌』では、形見の品は、「但心をして金鈿の堅きに似たらしめば 天上人間会はず相見む」という二人の再会の意味を込めたものであるので、そのことが桐壺巻においてどのように展開するかということが問題になると思われる。

続いて、絵に描かれた楊貴妃の姿から更衣の生前の姿を偲ぶところである。

絵に描ける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとほひすくなし。太液芙蓉、未央柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。<sup>(三五)</sup>

帝にとっては絵に描かれた楊貴妃の姿は生き生きとした美しさに乏しい。その絵から偲ばれる楊貴妃の容貌は、「太液の芙蓉未央の柳 芙蓉は面の如く柳は眉の如し」と、芙蓉や柳に譬えられるものであり、その唐風の装いは端麗ではあったろうが、やさしくかわいげだったことを思い出すと花の色、鳥の声にも譬えるものがないという更衣の姿が偲

ばれる。中国と日本の趣味の違いとされるところであるが、この文の意図からすると、その楊貴妃の姿は、「花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき」という更衣の姿を引立てるものとして用いられている。しかも、楊貴妃の姿は絵から想像されるものであるが、更衣の姿は現在、帝の脳裏に思い描かれ、生きているものである。

さらにこれに続く『長恨歌』最終部分の引用である。

朝夕の言ぐさに、翼をならべ、枝をかはさむと契らせ  
たまひしに、かなはざりける命のほどぞ尽きせずうら  
めしき。

(二三五)

この一文は、「七月七日長生殿 夜半人無く私語の時 天に在りては願はくは比翼の鳥と作り 地に在りては願はくは連理の枝と為らむ」という比翼連理の契と、最末尾の「此の恨みは綿々として尽くるの期無けむ」をふまえる。しかし、「此の恨み」即ち契が果たされなかった恨みに対して、桐壺巻の「かなはざりける命のほどぞ尽きせずうらめしき」は、帝にとって、思うに任せなかった更衣の命の短さがより強調されている。従ってこの部分でも、玄宗と異なる帝の思いが際立たせられていると言える。

この帝の思いは、先の更衣の歌、「かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり」と、死に行く時に帝

を思つて痛切に生きたいと願つたことと対応していると見られる。またこの更衣の短命のことは、帝の使いとして更衣の里邸を弔問した命婦に更衣の母が、「今までとまりはべるがいと憂きを」(二七)と言つたのを始めとして、帝の参内の要請に答えた言葉、「命長さのいとつらう思ひたまへ知らるるに、松の思はむことだに恥づかしう思ひたまへはべれば」(二五)とも関わっている。『莊子』(外篇・天地)の「寿なれば即ち辱すかしめ多し」と、「いかでなほありと知らせじ高砂の松の思はむことも恥づかし」(古今六帖・五)をふまえる。これは帝の返事に、「かくても、おのづから、若宮など生ひ出でたまはば、さるべきついでもありなむ。命長くとこそ思ひ念ぜめ」(三四)と受けられている。帝は更衣の命が短かつた代わりに若宮によくしようという気持ちがあるであろう。従つて、この「かなはざりける命のほどぞ尽きせずうらめしき」は、このような経緯を受けて、『長恨歌』をふまえながらそれを意図的に変えた部分であると見ることができ。

この部分は、方士の蓬萊宮訪問に比せられる命婦の更衣里邸弔問を受け、『長恨歌』最終部分の引用であるということからも、桐壺巻が『長恨歌』に対してその違いを明確に際立たせていると考えられる。即ち、亡き更衣の魂の在処

を捜し求める手段を持たない帝の悲しみを受け、更衣の姿を偲ぶ心は絵では慰められないこと、そしてそれは結局、比翼連理の契にも拘らず、更衣の命を思うに任せなかったという恨みに集約していくのである。

このような帝の恨みはどのような展開を齎すのであろうか。先の更衣の形見の品が持ち帰られたことについて、古沢未知男氏は、「即ち前者（更衣の形見の品…筆者注）は源語全般より眺むれば、一応長恨歌に倣って設けた形式的・物的遺品であり、ついで之に代って出現する光源氏こそ、真に本篇作者の意図する実質的・人的遺品といふ事が出来る」<sup>(註五)</sup>、また白詩との違いについて、中西進氏は、「白詩には見えない皇子が『源氏物語』に登場するのは、更衣の命の<sup>(註六)</sup>かなさと対置させられた、次代の命の存在としての意味を<sup>(註七)</sup>になつてのもののだろ<sup>(註八)</sup>う」と述べられている。

先の、命婦を更衣の里邸に遣わした時に帝の文が更衣の母に伝えられていた。

ほど経ばすこしうちまぎるることもやと待ち過ぐす月  
日に添へて、いと忍びがたきはわりなきわざになん。  
いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、もろともには  
ぐくまぬおぼつかなさ<sup>(註九)</sup>を、今は、なほ、昔の形見にな  
ずらへてものしたまへ。

(一九)

帝は更衣を亡くした悲しみを鎮めることができないので、若宮を引き取ることでそれを慰めようとしている。更衣の母もそれを承諾しないわけにはいかない。このように見ると、『長恨歌』詩句の直接引用の部分は、更衣の命が思うに任せなかったのを継ぐものとして、若宮の登場が必然化されると考えられる。

### 三、伊勢の歌の引用

その後の、帝の眠られない様子を述べた場面にも『長恨歌』の引用がなされるが、その様相は前と異なっている。

月も入りぬ。

雲の上も涙に暮るる秋の月いかですむらむ浅茅生  
の宿

思しめしやりつつ、灯火を挑げ尽くして起きおはしま  
す。右近の司の宿直奏の声聞こゆるは、丑になりぬる  
なるべし。

(二六)

ここでは歌の「涙に暮るる秋の月」を受けて、「孤灯挑げ尽くして未だ眠りを成さず 遅々たる鐘鼓初めて長き夜」が引かれている。先のように帝が『長恨歌』の詩句を思い浮かべるのではなく、帝の眠ることができない様子を述べるのに用いられている。これに続く部分も同様である。

人目を思して夜の御殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。朝に起きさせたまふとても、明るくも知らでと思し出づるにも、なほ朝政は怠らせたまひぬべかめり。

「朝政は怠らせたまひぬべかめり」は、「此れより君王朝政せず」に拠り、ここでも帝の様子を述べるのに用いられている。また「明るくも知らで」という伊勢の歌がそれを導く形になっている。その歌、「玉すだれあくも知らで寝しものを夢にも見じとゆめ思ひきや」は、上句が「春宵は短きを苦しみ日高くして起く」に、下句が「魂魄曾て来たりて夢にだに入らず」に拠る。従つて、上句と下句で、楊貴妃が玄宗の寵愛を受けた生前のことと、夢にもその姿を見ることができない死後のことが対比して詠み込まれている。それによつて貴妃を失つた帝の悲しみが強調されている。『伊勢集』の帝の歌五首の中でもそのような歌はこれだけで、他は貴妃死後の帝の悲しみを述べた歌である。下句がふまえた「魂魄曾て来たりて夢にだに入らず」は、先の帝の歌の、「つてにても魂のありかをそこと知るべく」と呼応している。

この伊勢の歌の上句がふまえた「春宵は短きを苦しみ日高くして起く」は、『長恨歌』では「此れより君王朝政せず」

に続いている。これをそのまま引いた「なほ朝政は怠らせたまひぬべかめり」は、『長恨歌』では楊貴妃在世中のことである。それが伊勢の歌を媒介として更衣の生前だけではなく、死後のことにも広げられている。この点が『長恨歌』と違う展開になっている。ここでは帝の更衣追慕の思いを直接述べる役割を持つのは、先のような『長恨歌』の詩句ではなく、伊勢の歌の方である。また先の『長恨歌』詩句の引用は、むしろ帝の更衣追慕の様子を際立たせる役割になつていたが、ここでは伊勢の歌に沿った形で帝の思いが述べられる。内容の上でも、先の場面は、更衣の姿を忍び、その命の短さを恨む帝の心が描かれていたが、この場面では、夢にも更衣の姿を見ることができず、朝政を怠りかねない姿が描かれている。

このような帝の様子はさらに進んで、近くに仕える者すべての次のような嘆きを呼び起こす。

「さるべき契りこそはおはしましけめ。そこらの人の譏り、恨みをも憚らせたまはず、この御事にふれたることをば、道理をも失はせたまひ、今、はた、かく世の中のことも思ほし棄てたるやうになりゆくは、いとたいだいしきわざなり」と他のみかどの例までひき出で、ささめき嘆きけり。

多くの人の非難や恨みをも構わず、この更衣のことでは道理をも顧みなかったというのは更衣生前のことである。そして政治をも擲つたようになっていくのは死後のことである。この二つが「今、はた」と、一連のこととして、「いとたいだいしきわざ」とされている。このように生前のことと死後のことを関連付けている点では伊勢の歌と対応している。

この部分は、桐壺巻の初めで、帝の更衣への寵愛が「世の例にもなりぬべき御もてなし」とされるのに続く、次の部分と対応していると言われている。

唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れあしかりけれど、やうやう、天の下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例もひき出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。

(二八)

言われているように、この「ひき出でつべく」が前の引用文では「ひき出で」にまで進んでいる。しかし、そのことよりも、「楊貴妃の例」とあったものが「他のみかどの例」となっているのは、同じ「例」ではあっても、「みかど」(帝或いは朝廷)のあり方が問題になっている点で注意を要す

る。これは伊勢の歌に導かれた、「なお朝政は怠らせたまひぬべかめり」という帝の政治のあり方を述べた部分とも繋がっている。

このように見ると、伊勢の歌の引用は、先の帝の歌とも呼応して、夢にも更衣に逢うことができないという嘆き、またそれが齎す帝の政治の怠りという展開を取ることによって、更衣の身代わりの藤壺の登場を導くと考えられる。

#### 四、源氏と藤壺の物語

源氏と藤壺は、いずれも帝の更衣追慕の心に従って登場するのであるが、その心に由来する二人への寵愛が結果として二人を結び付けることになる。

上も、限りなき御思ひどちに、「な疎みたまひそ。あやしくよそへきこえつべき心地なんする。なめしと思さで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどはいとよう似たりしゆゑ、かよひて見えたまふも似げなからずなむ」など聞こえたまへれば、幼心地にも、はかなき花紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。

(四四)

帝にとって、二人は「限りなき御思ひどち」として、通説では帝の言葉は、藤壺を源氏の母として見立てることがで

きそうな気がする、源氏は顔つき・目元が更衣によく似ていたので、藤壺が源氏の母のように見えるのも不似合ひではないということである。これに従えば、二人は、帝のこの上なくかわいがつてゐる者同士である上に、亡き更衣の存在を介して母と子のような密接な関わりを持つことになる。

帝の二人に対する寵愛は、世人から次のような評判を得るに至る。

世にたぐひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御容貌にも、なほにほはしさはたとへむ方なく、うつくしげなるを、世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おほえもとりどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。

(四四)

帝が世に比類のない美しさと見、評判の高い藤壺にも優つて、源氏の輝く美しさは形容のしようがなくかわいひので、世の人は「光る君」と呼ぶ。藤壺はそれに並んで寵愛もそれぞれに厚く、「かかやく日の宮」と呼ばれる。源氏の美しさは、「花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき」という亡き更衣の美しさを偲ばせるものであらう。それは、「光る君といふ名は、高麗人のめできこえてつけたてまつりたるとぞ」(五〇)と、異国の人も認めるところである。源氏は

その天性の美貌によつて「光る君」と呼ばれるが、藤壺は、源氏に並ぶ美貌と共に帝の寵愛が厚いこともあつて「かかやく日の宮」と呼ばれる。その意味するところに多少ずれがあるが、「光る」、「かかやく」と、相通じる最高の美質を持つ呼び名によつて、二人は本質的に近い存在として位置付けられる。

こうして二人は、母と子のような間柄として、またその呼び名に示される美質によつて、名実共に結び付けられることになる。同時に帝は、世の声望の高い二人を膝下に置くことによつて、「他のみかどの例」が引き出されるような事態を克服しただけでなく、将来にわたつて繁栄が予想される基盤を形作ったと言えよう。その上で、二人は、源氏に賦与された、高麗の相人による「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人」(三九、四〇)という相に従つて、共に希有の運命を生きていくことになる。

終わりに

「亭子院」が描かせた、「長恨歌の御絵」にあつたと考えられる詩句及び伊勢の歌は、帝の「たづねゆくまほろしもがな」の歌の、『長恨歌』との違いを認識した上でなお更衣

の魂の在処を捜し求めようとする帝の心を受ける形で以後の場面に引かれる。即ち、その詩句は更衣の命を思うに任せなかつた帝の恨みを際立たせ、伊勢の歌は夢にも更衣に逢うことができないという嘆き、またそれが齎す帝の政治の怠りという展開を取る。そのことによって、それぞれ、更衣の命を継ぐものとして若宮、更衣の身代わりの藤壺の登場を導くと考えられる。そして、この二人は、帝の寵愛により、亡き更衣の存在を介して、密接に結び付けられる。そのことは帝の治世が繁栄する基盤となるとともに、二人の希有な運命を拓くことにもなる。

このような桐壺巻の物語の展開は、『長恨歌』の「但心をして金鈿の堅きに似たらしめば、天上人間会ず相見む」という形見に託された言葉によって、それは『長恨歌』では実現されないが、帝の更衣追慕に基づきながら個別に登場した、次世代と言うべき源氏と藤壺が結び付けられるという形で実現したと考えられる。この意味において、桐壺巻は、不吉な物語である『長恨歌』を脱却し、新たな愛情と希有な運命の物語として出発することになったのである。

『大和物語』百四十七段には、宇多天皇皇后温子に献上された生田川伝説を絵にしたものに、後日譚として絵の中の人に代わって歌が詠まれ、伊勢も男の心になって詠んで

いる。中には男と女の贈答歌の形になっているものもある。宇多朝において、伝説を、絵とそれに詠まれた歌によってかなり自由に享受したことの一端が窺える。『伊勢集』で見える限り、宇多上皇が「長恨歌の屏風」を描かせ、伊勢に歌を詠ませた意図は、幽明境を異にしても、玄宗と楊貴妃の変わらない心を歌うことであつたと思われる。桐壺帝は、それを「亭子院」の「長恨歌の御絵」として受け継いで、玄宗と楊貴妃に比すべき帝と更衣に深く関わる、源氏と藤壺の新たな愛情の物語を開く役割をになうことになったのである。「亭子院」の名は、この二人の物語が未来の帝に関わっていくものであるので、天皇名を出して確たる由来を示す必要があつたと考えられる。

注1 『源氏物語』本文の引用は、新日本古典文学全集（小学館）により、冊数と頁数を示す。冊数を省略する場合は第一冊による。以下同じ。表記は私に改めたところがある。

注2 例えば、「史実を巧みに取り込んで物語内の場面を構成している」（新日本古典文学大系 一・一五頁）とある。

注3 玉上琢弥編『紫明抄河海抄』一八六・七頁。また玉上琢弥氏著『源氏物語評釈』でも、「先に、『かゝるほどにさぶらひたまふ例なきことなれば』とあり、また後に寛平の御遣識も引かれてあるのでこの巻は、宇多天皇退位後、延喜



七年（九〇七）以前を舞台としていると考えられたことであらう』（第一巻八〇頁）とされている。

注4 注3の評釈 八〇頁。

注5 中西進氏著『源氏物語と白楽天』一三頁 岩波書店 平成九年七月。

注6 「桐壺巻と長恨歌と伊勢の御——源氏物語の本性（その四）——」『源氏物語研究』所収 二二〇頁。角川書店 昭和四十一年三月。注3の評釈一〇三頁。

注7 「源氏物語の源泉 v 準拠論」『源氏物語講座 第八巻』所収 一五二頁。有精堂 昭和四十七年三月。

注8 『新編国歌大観 第三巻 私歌集編I』「伊勢集」五二、六一番 四六頁。

注9 注3の評釈 七九頁。

注10 注6の論文 二二二頁。

注11 『長恨歌』の引用は、注1の書巻末の付録による。以下同じ。

注12 新日本古典文学大系 一・一七頁脚注。

注13 岩波文庫第二冊・一〇九頁。

注14 『新編国歌大観 第二巻 私撰集編I』三〇五七番 二三五頁。

注15 『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』九九頁。桜楓社 昭和三十九年六月。

注16 注5の書 一七頁。